

巻頭言

UDC 061.62(042.5)

年の初めにあって

所長 田中 尚



1978年の新春を迎えるにあたり、一言ご挨拶申し上げます。

私は、昨年11月14日付を以て、生産技術研究所の所長に任ぜられたばかりであります。したがって新年のご挨拶が就任のご挨拶になることをお許し願います。

日本最大の附置研究所である生研の所長の職責を果たすことは非常に困難なことと考えられ、その責任の重さをひしひしと身にかけております。私といたしましては、全力を尽くしてこの任務に献身する覚悟ではありますが、何分にも微力でありますので、力の及ばない点多々あると案じられます。皆様方のご鞭撻とご協力を心からお願い申し上げます。

生研にはすぐれた研究業績をあげるために日夜精進しておられる多数の教官と研究の推進に熱心に協力しておられる技術系職員の方々がおられます。その努力の結果として、生研の存在は社会に認められ、学界で高い評価を得ております。さらに生研には多くの有能な事務職員がおられ、それぞれの立場で生研の運営に熱心に寄与しておられます。このように高い評価と安定した運営の実績を背景として所長の任に当たれることは、私にとっては大変ありがたいことでもあります。

生産技術研究所は昭和17年に設立された東大の第二工学部が、戦後の学制改革によって、昭和24年に「生産に関する技術的諸問題の科学的総合研究、ならびに研究成果の実用化試験」を目的とする工学の総合研究所として設立されたものであります。この転換には二つの大きな苦しみがあったと諸先輩から伺っております。その一つは62講座から35部門への縮少の苦しみ、他の一つは戦後の疲弊の中で、工学の総合的研究という当時としては全く新しい共同研究の分野で成果を挙げるといふ任務を課せられたことであります。幸いに諸先輩の並々ならぬ努力により、この苦難を見事に切り抜けてこられたことは、生研に一致協力という立派な伝統を残し、協調の精神を植え付けたと考えます。

生研に伝統として培われた協調の精神は当然総合的な共同研究を生む母体となり、既に多くの実績を挙げております。最近の例で申しますと昭和46～48年度に行われた第一次臨時事業「都市における災害・公害の防除に関する研究」昭和49～51年度に行われた第二次臨時事業「災害・公害からの都市機能の防護とその最適化に関する研究」などは生研における多くの研究者を動員して行われた代表的な共同研究で、多くの立派な成果を挙げ得たことは、皆様のご存知の通りであります。

このように生研が立派な共同研究を組織し得る実力を備えていることは文部当局も認めるところで、最近では共同研究の中核体としての研究センターの設立が進んでおります。すなわち昭和48、49年度には「計測技術開発センター」、昭和50、51年度には「複合材料技術センター」、本年度は「多次元画像情報処理センター」が設立されました。

鈴木名誉教授(前々所長)がよく次のように生研の特徴を説明されました。生研は総合工学研究所であって、工学の広い専門分野にわたって、それぞれの研究分野で深い基礎研究が行われていて、必要に応じて複数の研究室が協同して、境界領域の研究や総合的な大型課題の研究を行うところに特徴がある。いいかえれば「研究協力組織」あるいは「形なき研究所」を、必要に応じてその中に組織することができる総合研究所として、日本で唯一つの存在であると。

以上述べましたように生研は30年近い歴史の中で、立派な伝統が築かれ、また歴代の所長を始め、全構成員の方々のご努力によって進むべき方向もほぼ定まっております。これは大変有難いことでありまして、私としましては歴代所長のとってこられた方針を受け継いで、その推進に力を尽くして参りたい考えであります。

所長の任務は、生研が常に指導的な研究活動を活発に続けてゆけるようにすることであり、そのために生研の管理運営を改善し、進歩させることに努力したい所存ではありますが、最初にも申し上げましたように微力であります。どうか皆様方の暖いご鞭撻とご協力を重ねてお願い申し上げます。

生産技術研究所が本年もますます発展してゆくことを期待して、新年のご挨拶といたします。